最強最弱の魔王虐殺

真野　優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最強最弱の魔王虐殺

【Ｎコード】
Ｎ１６７１Ｑ

【作者名】
真野　優

【あらすじ】
手違いで異世界に召喚されてしまった麗留　美育は、本来来るはずだった人に代わって冒険をすることに。
魔王が大量発生？ていうかそれも魔王じゃないし！え？普通なら魔王と呼ばれるぐらい強いのがたくさんいて、それを束ねる更に強いのがいる？
やれやれ面倒だ、さっさと倒して帰ろう・・・って帰れないの！？
おいおい何やってくださってんだ？

※この作品は、「最強最弱の異世界魔法騎士」にリンクしています。
そちらもどうぞ！――――――では、開幕です！

第1話　手違いで召喚されちゃいました。（前書き）

おわかりでしょうが、最強最弱の続編です。
ですが、元の作品と完ぺきにリンクしている自信があまりありません。

これはまた一つの物語として楽しむ方法もありだと思います。

ちなみに主人公はもう最強です。

それが嫌な方は、小説家になろうトップへどうぞ。

第1話　手違いで召喚されちゃいました。

これは、まだシレンが旅に出る前のお話――――――。

「・・・・・・なんだここは？」

それが、私――――レイルの異世界着第一声だった。

本名は麗留　美育

自分で言うのもなんだが、変わった名前だ。

さて、科学者としては、こういう謎の事態にはかなり好奇心がわく。

何が起こった場合にこうなるんだろう・・・ワームホールはタイムスリップの可能性はあるが、こんなところは過去にもなかった。

つまり、私たちの知っている歴史以前の世界（古代文明とか色々ある）か、歴史が書きかえられていたりとか、可能性はいくつか考えられる。

まだ原理の解明がされていない、つまり実体験などだれもしたこ

とがないため、一番正解であってほしいようでほしくないのは、『平行世界』とか『神隠し』だが・・・。

『済まない、手違いだったのだ』

突然、しわがれたおじいさんの声が、頭に響いてきた。

『なに？私がここにいることと何か関係があるのだな？』

『鋭いな』

『そりゃどうも。で、私はなぜここの言語がわかっている？それとも貴方が日本語を知っているのか？そして手違いって何だ？そしてさらにここはどこだ？元いたところには帰れるのか？』

そういいながらも、頭の中では、「この世界ではテレパシーとかそう言ったものが存在するのだな」と考えていた。

今いるところは、裏路地みたいな所だ。

街中なのはよかった。情報収集ができる。そして砂漠とか森とかに放り出されなかっただけでもましだ。

ただ・・・

「よお、姉ちゃん。俺とあそばね」

グドッ

私が振り向きざま蹴飛ばすと、あり得ないような音がして、いやらしい声音で話しかけてきた、男が吹っ飛んで壁にぶつかって気絶した。

使い物にならなくなったかもしれない。

「ふう・・・これで何回目だ？」

ここに来てから、すでに数人は同じ様に蹴飛ばしている。

重力でも違うのか、自分より大きい男が軽々と吹っ飛ばされていく。

まあ、護身術として習っていた柔道や空手が役に立っているな。

ただ、自分の二倍ほど体格がある男子ですら、軽々と組み伏せられたから、飽きて科学の道に進んだ。

そいつは、女子と組みあえるからか嬉しそうにしていたが、柔道着の襟と袖をもって試合が始まって一秒後には、床にたたきつけていた。

空手は・・・全国大会であっさり優勝してからつまらなくなった。

反則級？何をおっしゃる。はっはっは！

「おいねえちゃーーー」

はいど――ん。

ここの人たちは馬鹿なのだろうか？既に近くに幾つもの犠牲者が転がり、積まれているのに、そんなものが目に入らないかのように何人もいいよってくる。

『元の世界には帰れないと思う。申し訳ない。本来なら帰れるだろうが、手違い・・・重大なミスがあったせいで、理が歪んでしまっている。これは前代未聞の話だ。どうなるかは全く分からない』

『そんな！だいたいここはどこだ？想像はつくが認めたくはないぞ！――――ここは異世界か！？』

『私たちの世界――――つまりここから見れば、貴女のいた世界は異世界だな』

マジ？最悪の想像が当たっちゃった・・・

私のしていた原子力の平和利用の研究は？私がいなければ、私のいるグループの研究が遅れ、核戦争防止に間に合わなくなるかもしれないのに！

そして、優。

もう会えないって訳？結婚ももうすぐだったのに・・・

今頃どうなっているんだろう・・・・・？

『本当に申し訳ない。一応君がこの世界でしなければいけないことを説明する。ちなみに、本来この世界に来るはずだった人は君も知っているはず・・・真野優という男の子だ。今強制的に君を帰すと、彼の存在が消えたりしてもおかしくはないし、君が向こうの世界に帰ったとたん消滅してもおかしくない。事実上どうなるかはわからない。帰す方法はあるが、それを実行するわけにはいかない。許してくれとは言わん。せめて優の代わりにこの世界を助けてやってくれ』

何という自己中な。

こういう展開が珍しいわけではない。もちろん架空の話の中なら。

それが我が身に降りかかってくることなど想像もしなかった・・・

ということは置いておいて。

『特殊な力＋最後には帰れる』か『帰れないなら、私の望むよう

に過ごさせる』のどちらかが普通のはずだが。

『もちろん、特殊な力は君も持っているぞ。【能力吸収】と【能力再生】いうのでいいか？自分の見た能力をすべて自分で使えるようにするのと、自分と相手が両方望んでいる場合に、その力の一部を対象に与えることができる。戦えば戦うほど強くなる、だな』

はあ・・・。どうせ内容も「魔王と戦え」とかそんなありきたりなことだろうし、クリアしても帰れないって言うね。

そして召喚であって転生じゃないのに、召喚したやつを探すところから始めなければならないってどういうこと？

『っていうかあんた誰？』

そういえば、今頃気づいた。

まだこいつが誰かわからない。眠らされて、仮想世界（バーチャルワールド）に連れてこられたわけじゃないとも言い切れない。

今の科学力なら不可能なことでもないだろう。「元の世界」なら。

『ああ、源龍と呼んでくれればいい。まあこの世界の時間と空間、世界を渡る力を持っている』

『わかった。じゃあ、魔王退治にでも行ってくるか』

『よく用件がわかったな。行ってきてくれ』

『能力の使い方は？』

『イメージして使う。それか魔法は普通に魔法の名前だけで発動させられる。県議は体が勝手に動くような感じだ。――――――無敵だろ？』

確かに。

それは無敵に近い。

『最後に一つ、元の世界で知ってた能力とかは使えるのか』

『無理だな。【どこでも〇ア】や【瞬間転移（テレポート）】が使えれば、いつでも魔王の元へ行って殺させることが可能だったのだが・・・多分次元の歪みが原因でこの世界でもそういう能力を持ったものがいるかもしれない。というかすでにそういう人を何人か発見している。次元のゆがみや時間のゆがみは、時間を超えて影響する。今後、何らかの事情で過去が変わり、また何かが起こるかもしれない。もう何も予測することはできない。存分に注意してくれ。最後に一言言っておく。この事件、誰かが意図的に起こしたものである可能性が強い。目的は分からないが、そいつがかなり強い力を持っているのは確かだ。――――――気をつけるように、後やられないように！以

上！頑張ってくれ！またいつでもわしに連絡を取ることは可能だ。
その方法はおいおいわかる。と思う。アディオース！』

ブチっ・・・ツーツーツー。

って電話の効果音流してるんじゃないよ！元の世界を思い出させないで！

私は、この世界に来て初めて、過去を振り返って涙を流した。

ちなみに、裏路地から一歩も動いていない。かなり変人に見えたことだろうが知ったことではない。

さらにちなみに、泣いている間にも近くには色々と悲しいことになった男たちが積み上がって行った。

第2話　さっさと魔王とやらを葬ることにします

さて、この世界で生きていくためにさしあたって必要なものが一つ。

それは、金。

「金がない・・・・・・！」

持っているのは、千円札五枚と一万円札二枚、後は小銭が。

使えるわけないよねー。

ちなみにこの世界の言葉はわかる。

ただ文字を読むのは無理。

『文字は、誰かが書いているのを見れば書けるようになるよ。その人が書いていた文字は』

『じゃあ金をどうしろと？』

『ギルドへ行って稼いでねw』

『何の武器も持ってない、しかも防具もなしで服装は変で、文字も読めない上に特技があるわけでもない私にどうしろと？』

『誰か良いパーティ見つけて、技をいろいろ見せてもらえば？』

『武器がないから剣技とか見せてもらっても意味がない』

『魔法も覚えられるからダイジョブ！とりあえずギルドに登録してこい。文字が読めない（書けない）ってどこかの男に話しかければ、教えてもらえると思うぞ。ついでに技を見せてと頼めば許可してもらえるんじゃないか？今、補正がかかってててかなりの美人になってるぞ』

『補正がなければブスだって言いたいのか？』

少し殺意がわいた。

『わしは嘘がつけんのだよ』

かなり殺意がわいた。

『だが、お主は相当な美人だったが、この世界ではほかにかなうものがいないだろうな。同じように転生してきた人を除いて』

へえー。お世辞じゃないって自分で言ってたから、本気なのか。

殺意が、やや消えた。

『いいからとりあえず行ってこい！』

源龍がややじれったそうに言った。

『はいはい。魔王クラスの魔物を何体倒せばいいんだ？とかこの世界の通貨は？とか魔王クラスの八一袋倒せばどれぐらいの金（円換算）が手に入るのか？とかいろいろ聞きたいことがあるが、ケチな源龍とやらは教えてくれそうにないので行ってきます』

『・・・・・・うざっ』

『何か言ったか？』

『いや何も』

『「思っただけ」とか言うなよ？』

『・・・・・・ガクガクブルブル』

向こうで源龍が震えているのがわかった。

こうやってしばらくからかいながら歩いていると、当然ながら意識はそっちに行くわけで。

ドンッ

「おい、何ぶつかって・・・」

「すみません」

ギルドへの道を聞きながら（源龍に）歩いてたら、銀髪のなかなか格好の良い男性にぶつかった。

「いやいや、かまわないよ。ところで君、どうしたんだ？上の空だったが」

やっぱり私も一般人である。

さすがにこのときは顔から火が出るかと思うぐらい恥ずかしかった。

「いえいえ。ちょっとギルドまで行こうと思いましたが、登録するにも文字を書く必要があるとか聞いて、頭の中で落ち込んでたんですよ」

「文字が書けないの？」

「読むのも無理です！」

何威張ってんだ、と自分で突っ込みを入れる。

「ふーん。僕の行き先も実は同じなんだが、一緒に来るか？登録ぐらいならしてあげるよ（もちろん登録費用はそっち負担で）」

「え？ありがとうございます（タダでそこまでしてくれるなんて優しい人だなぁ）」

なんだかかみ合っていない気がするが、気のせいだろうか？

それからしばらく歩くこと数分。

なんだか、ものすごく注目を浴びるようで、いろいろな女たちがグレネスタ（あ、当然隣の人の名前）に目を奪われ、私は隣にグレネスタがいるにもかかわらず、男どもから声をかけられた。

そのたびにぶん殴っているが、途中でグレネスタがあきれたような顔をしていたので、ちょっとまずいのかな、と思いなおしてやめた。

さすがに学習能力があったらしく、それ以来手を出してくる男はいなかったが。

「さて、着いたよ」

言われなくてもわかるって言うぐらい、「いかにもここがギルドでース」って主張しているような建物だった。

そこそこ広くて、周りにいかつい感じの男どもが群がっている。

（この人たちで分かったんだから、建物関係ないか）

中世ヨーロッパに時間旅行したらこんな建物があったんだろうな、って思う。

レンガ造りの教会に近いようなものだった。

教会で荒仕事を扱ってるのか、と少し思ったが、これは教会じゃないんだと自分を納得させる。

「じゃあ登録お願いします」

「うん」

そう言って彼は手を出した。

握手してほしいのか？

と思ってその手を握ってあげたが、きょとん？とされただけだった。

名刺か何かいるのかな？

と思って、懐に入っていた名刺を渡す。

何これ？といった風にまじまじと名刺を見詰めるグレネスタ。

「ん？どうかしたのか」

改めて直接聞くことにした。

「いや、登録手数料。登録するのに金貨がいるんだよ」

この世界では、銅貨三十枚で銀貨一枚、銀貨五十枚で金貨一枚になるようだ。

銅貨一枚、およそ百円。金貨一枚は十五万円相当ってことだ。

ちなみにリンゴ（に似た果物で、値段が元の世界と同じぐらいらしい）一個が銅貨一枚で買えることから、レートは大して変わらない。

「ぼったくりか！」

「そうだねぇ。でもここがなかったら仕事が出来ないって言う人もかなりいるから、足元を見てるんだよ」

・・・・・・くそっ！

「もしかして・・・金持ってないの？」

「ＹＥＳ！」

「いえす・・・？」

「あ、肯定っていう意味です。もちろん！というような感じだと思ってください」

「ふーん、つまり金がないってことだな」

「うん。銅貨一枚持ってない！」

「それは・・・なんというかすごいな、逆に。よくここまで生活できたなぁ」

いや、来てからまだ一時間ぐらいしかたってないしね。

当然、一時間なら無一文でも快適に生活でき・・・

グルゥルゥゥーーー

「腹も減っているみたいだな」

そういや、昼飯まだだったな・・・一時間と持たなかったのか私は・・・。

「・・・・・・」

何となくしゃべる気力もなかったので、とりあえず頷いて首肯した。

「やれやれ。金は払ってあげるから（あとできっちり返せよ。二倍にして）、パーティ組んで仕事しようか」

うわー神様だ！地球の男にも見習わせたい。

その後、登録された私のランクはE。

SSまであって、自分の一つ上のランクか、無制限のクエストしか受けられないようになっているみたいだ。

てんぷれっ！などと叫びたくなったが、ただの変人に見えるから

やめておいた。

「さて、（金貨一枚は稼げる）良い依頼ないかな～」

ちなみに彼のランクはB。E、D、C、B、A、S、SSだから、真ん中のランクだということになる。

だけど、お気の毒にDランクのまでしか受けることが出来ない。

「うん。近場で、討伐系の依頼で、報酬だけじゃなく懸賞金がかかってて、レアな素材とか宝石とか、一気に金がはいるような依頼ないかな」

うん。我ながら厚かましい。

そんな依頼があるわけないか・・・と思っていたら、何かグレネスタ（グレって呼んでいいそうだ）が見つけたらしい。

「一応、あるにはあったぞ。近場で、討伐系の依頼で、報酬だけじゃなく懸賞金がかかってて、レアな素材とか宝石とか、一気に金がはいるような依頼」

え？あったのそんなやつ！

「しかも無制限と来た・・・きっと、君みたいに新人だけど強いって言う人がいるから、そういう人たちにも向けた依頼だね。何を倒せばいいのかな・・・って、巷で暴れまわっている魔王一体！？無理無理。あきらめ・・・」

えーと、なになに？金貨百枚？

「よし、それにするか！」

「え？」

驚くグレを尻目に、ベリッと用紙をはがして、受付に持って行った。

「えーと、一応これ無制限の依頼ですが、やめておいたほうが」

「登録お願いします」

目で圧力をかけると、ひるんだ受付嬢が、半泣きになりながらしぶしぶ受け付けてくれた。

「はい、行ってらっしゃい。御武運を・・・・ぐすっ」

ー☆ー☆ー☆ー☆ー☆ー☆ー☆ー

どうやら、モンスター（魔獣、と呼ぶらしい）を倒すと、その魔獣のコアと呼ばれる、心臓をはぎ取って、ギルド内で換算してもらえるらしい。

魔王のコアだけでも、金貨一万枚は下らないとか。ちなみにゴブリン程度のなら、銅貨十五枚ぐらいらしい。

魔獣の持つ魔力によっても変わるとか。

要するに、強い敵を倒すか、雑魚をたくさん倒すか、ってことだな。

「君、なんて無謀なことを・・・」

「え、あれ何を討伐するの？よく見てなかった」

「魔王だよ魔王！その討伐のために、近々勇者が異世界から召喚さ

れるとか。そこまでしないと倒せないような敵相手に何してんだ君は！依頼を途中でキャンセルするのに、かなりの金が要りランクも下がるんだぞ！君の場合は失敗したらもう登録取り消しになる。もう一回金貨を払わないと登録できないぞ」

「ああ、勝てばいいんでしょ勝てば」

「そりゃそうだけど・・・」

とりあえず、襲ってきたゴブリンを相手にしているグレの剣技を見せてもらった。

よし、マスターした。

「ひとつ訊いて良い？グレは魔法とか使える？」

「一応はね。火属性だけだけど」

「やって見せて～」

それからしばらくは、グレから魔法を見て学んだ。

どうやら、かなりの使い手らしく最上級とかいう魔法が使えるようだ。

低級、中級、上級、最上級、究極があり、それに加えてオリジナルのがある、という設定。

それの最上級までが使えるんだから、相当なんだろうな。

私ももう使えるけど。

一通りやり終わったのか、動きを止めたグレの周りには、ゴブリンやオークの遺骸が大量に積み上がっていた。

さて、コアの回収回収。

「で、これだけの技を見せなくちゃならなかった理由は？ただでさえ生き残れなさそうな依頼受けに行くのに、今から魔力消耗しなくちゃならなかったんだが」

「あ、私の能力は【能力吸収】だから、この目で見た技や魔法をすべて使えるんだよ」

「何それあり得ないでしょその能力ていうかそんな能力持ってるの

は勇者だけのはずだし多分異世界から来るか魔獣の子孫でもない限りそんな特殊能力なんて持ってるわけがないし、一体あんた何者なんだ！」

あれ？もしかしてさっそく正体ばれるパターン？

『・・・手際が悪いな』

『うるさい文句付けるな。で、ここはもうばらしていいの？』

『別にいいんじゃないか？何も問題はないだろう。あとでこいつを殺せば万事オーケー』

『んなことできるかぁぁぁぁぁぁ！』

『黙っているわけにもいかんだろうから、もう話してしまえ。あとはそいつが吹聴しなければいいんだが』

さて、できるだけ落ち着いて平然と言おうか。

「そのとーり。なんか召喚の儀式が途中で失敗しちゃって、こんなところに本来無関係な私が飛ばされちゃいました」

「なるほどー。君ちょっと頭がどうかしてるんだな。なるほどわかった」

「事実だからね？なんならこの世界にはないはずのもの見せてやろうか？？？」

といったはいいが、何も特に持っていない。

ペンとか金とかはあるけど、金は証明にならないしな・・・。

「いいよ。いまちらーっと見えたんだけど、君、ガラスって知ってる？」

「もちろん。今財布にも根付としてついているし」

財布についたガラス玉のストラップがもちろんガラス製。

「じゃあそれが、魔王のコア並に高価なものだって知ってた？」

「はあぁ？なんでそんなに！」

「アメジストとかダイヤモンドとかオリハルコンとかアドバンスドスリードラゴンの竜玉とか、いろいろなものがあるこの世界だけど、

ガラスぐらいすきとおっていて、ある程度の硬さがあって、魔法の行使の時に、威力が上がる媒体として最適なものはないんだよ」

へー。ガラスってすごいんだねー。

「ちなみに、『プラスチック』ってある？」

「うん、多分あると思うよ」

コンビニで飲み物を買った時にもらったビニール袋とか、飲み終わった後のペットボトルとか。

「あれは、弾力もあるし、簡単に曲げられて加工も簡単だし、がんばれば鋼とかと同じぐらいの強度を持つとかいう伝説が」

「たぶんそれ半分がウソだよ」

鋼とプラスチックが同じぐらいの硬さになるわけがない。

「やはり、君が異世界から来たことは間違いないね。じゃあさっきの金貨の代金としてそのガラスを貰っていいかな？」

「いいよー。私がいたところでは、ガラスよりアメジストとかダイヤモンドのほうが、かなり価値あったし、それもらえるならね。ダイヤの指輪とか憧れるなぁ」

「このガラスを売れば、ダイヤでできた指輪ぐらい、すべての指にはめてもまだかなりあまるぐらい買えるよ。じゃ、いただくねー。（これがあれば、キャンセル手数料と、ランクダウンを補って余りある）」

そんなこんなで、初魔王退治が近づいてきた。

第3話　さて、これがチュートリアルの終わりですか？

今、私とグレは絶賛逃亡中です。

何からかって？もち、魔王に決まってる！

「勝てるんじゃなかったのかーーーーー？」

グレが走りながら叫んでいる。

当たり前だけど、策があって逃げているんだ。

「あいつが必殺技とか使うまで待ってて！それコピーして投げ返す！」

言下に、魔王の右肩あたりから、ふっとい雷光が発射される。

私の足もとにぶつかって、煙と大穴を発生させた。

「あっぶないなーーーー！それっ！」

私の肩からも、同じものが仕返しとばかりに発射される。

爆音とともに、地面がまた大きく抉れる。

雷光は大きく外れたが、そんなのは当然予想のうち。

私が雷光を使ったのを見て、驚いた魔王が次の技を仕掛けてくる。

「≪堕天使の業火≫」

「えーっと、なんだったっけ？そうそう、≪アトランティスの復讐≫・・・だったかな？」

さっき魔王が使った水流を使って、発生した火球ごと消し流す。

水と炎の究極級の魔法らしい。

これが使えれば、一人で一個大隊ぐらいなら朝飯前でも壊滅させられるらしい。

なら、さっきからバンバン使っている魔王には、百個大隊ぐらい連れてこないと勝ち目がないな。

「なにっ！≪昇華の聖光≫」

「魔王がそんなん使ってんじゃない！≪漆黒の闇≫」

現れそうになった光の攻撃（どんなのかはわからない）を、発動前の魔法陣ごと闇で覆って消す。

「っりゃあ！」

グレから借りた剣に、闇と風と炎と雷の魔力を込めて、魔王を上から切り下げる。

同時に、上空に≪突風≫を放って加速する。

ギィィィィィン！

固い金属音がして、魔王の体に食い込むはずだった剣が肩口で止められている。

「貴様・・・いったい何者だ？勇者にしては身なりがひんそ・・・」

「貧相言うな！」

返す刀で横なぎに一閃。

慌てて魔王が後ろに飛び退ってかわすが、よけきれずにローブが大きく裂ける。

「これでもガラス玉持ってたんじゃあああああ！（盗られたけど！）」

「人の話は最後まで聞け！」

魔王、魔力をためて右手を突き出す。

そこから魔力の弾丸が発射されるが、普通に避けてかわす。

「てめーは人じゃないだろうがああ！」

「そんな言葉づかいで、淑女として恥ずかしいと思わんのかお前は！」

「微塵も思わん！」

後ろでグレが腹を抱えて笑っている。

イラッと来たのは魔王も一緒だったようで。

「「笑うな！」」

私の発した熱線と、魔王の雷撃によって、あえなく撃沈。

まあ、ガラスを一生懸命抱え込んでかばったことは認めてやるが、ちょっとキモい。

「「ハモるな！」」

今度は、至近から撃ち出される雷撃が私に向かって飛んできたが、地面を競り上げてガードする。

「そんな軽装で・・・」

私は魔力も使って高く飛び上がり、加速をつけて一気に落下する。

もちろん、剣をしっかり構えて。

「私の剣が防げるはずがないだろうがっ！」

神の盾を持つ盾をも貫く？一撃。

のはずなのに、またもや魔王の肩でとまっている。

「あいにくと、魔力を固定してるんでな」

「あっそ」

にやっとして解説を挟んだ魔王だが、そんなものは聞かずに着地した後、手を突き出して光線を魔王に浴びせる。

どうせまたよけられるだろうが、膨大な光量が魔王と私の視界を塞ぐ。

そしてタイムラグをつけてもう一回、光線を放つ。

本来なら、視界いっぱいに広がる白い光のおかげで、「攻撃された」と認識できるのだが、すでに前の攻撃の余波であたりが真っ白だから、攻撃は気付かれない。

そして気付かれなければ、よけられることもない。

「よし、決まった・・・？」

この程度で決着してしまっては、私の使える技があまり増えないのだが。

なんだか知らんが、魔王は個々の能力を持っているそうで、それを頂かないことには何とも・・・

「ほう、二連撃か・・・おしかったな」

だから、煙と閃光が晴れた後、姿を現した魔王を見て、喜びと失望を同時に感じた。

「で、どうして避けられたんだ？」

まともに食らったら致命傷のはずだが。

「我の固有能力は、≪瞬間移動≫でな、使うまでに時間がかかるが、一度準備しておけばいつでも使えるから便利だぞ。お前の攻撃を見て、そのまま上空に転移した。あとは浮いているだけでよかったからな。二発目は避けてなどおらん。もともとはるか違う方向に飛んでいってたからな。あれなら転移する前でも当たらなかっただろう。・・・お前の方向感覚はある意味かわいそうだな。魔法使いとしては致命て」

「話が長い！」

剣を一閃。

が、これまた転移でよけられる。

先ほど姿を現す前に唱えていたんだろう。厄介な魔法だ。

「で、ひとつ聞きたいんだが、その転移の魔法ってやつをちょっと見せてもらえないか？そんなもの上がるなど信じられない」

何かこの近くにトリックでもあるんじゃないかと言いたげな私の視線に気分を害したのか、素直に前にやってきた魔王は、印を結び出した。

「普通、敵に技を見せたりしないんだがな・・・それ」

印を結び終えたとたん、魔王の姿が消えた。

私は、絶対こうするだろうな、っと思っていたため、抜いていた剣を後ろに突き出す。

肉を断つ感覚とともに、盛大に血が噴き出す。

「な・・・？転移を見破っただと？」

「あんた馬鹿？普通は技なんて見せないとか言っているやつが、披露してきたんだ、何かしらの裏があるに決まっているだろうが。それに今みたいに背後を取られたかもしれない状況なら、もしそこにあんたがいなくても剣を突き出してた」

うん。これは一応本当。

だって、上空に飛んだあと、上から攻撃してればよかったのに、わざわざ着地して、煙の中から出てくるような演技までしたんだ、意外と頭が悪いんだろうとは思う。

で、単純なやつほど、人を驚かせたがったり、背後をとりたがるんだ。

「お前・・・真剣に何者だ？」

私は、冥土の土産にでもいいものを見せてやろうと、最高の笑顔で微笑み、言った。

「いえ。ただの通りすがりの、手違いで呼ばれた異世界人です」

そして、魔王の腹に刺さっていた剣を、真横に払って抜いた。

魔王の持っていたローブと杖を頂いた後、コアももらっていくことにした。

「おーいグレー。コアとってあげて・・・」

しかしグレは、何者かによって近くで真っ黒に炭化していた。

しょうがない・・・

私は、覚えたばかりの魔法で、近くに穴を掘り、その中に魔王の遺体を埋めた。

一応、墓碑でも刻んでおくか。

『バカだけど、ちょっぴり面白い笑いの魔王、ここで寝てますよっ！』

こんなところでいいだろう。

これでも一応人型を取っていた魔王だ。人を殺したことなんてない私にとっては、一応当分心の中から離れることはないだろう。

しかし、あまり罪悪感に浸っている暇はない。

まずは、このグレを担いで帰らないと。

いや、待てよ・・・

「≪アトランティスの復讐≫」

私の背後に生れた青い魔法陣から、膨大な量の水流が（それこそ、琵琶湖の水を三分の一ほど使ったんじゃないかっていうぐらい。ほんとはもっと少ないんだろうけど）気絶したグレに襲いかかる。

よくある、水を掛けて起こす戦法だ。

しかし、バケツの水どころか、大量の水をぶつけてやったのに、目を覚ます様子はない。

むしろ逆に、どこか具合が悪くなったように見える。

「火事だ――――――！」

そう叫んで、≪堕天使の業火≫で彼の服に火をつけて起こそうかと思ったんだが・・・

「ちょっと！わかったわかった！人一人起こすのにそんな大火力必要ないからね！」

狸寝入りだったのか、慌ててグレが飛び起きた。

「で、魔王は倒せた？」

「うん、けどコアのはぎ取り方とかわからんから埋めてきた。文句ある？肝心な時に寝てたくせに？」

「・・・あります！盛大にあります！金貨一万枚を地面に埋めるとか何考えてんだあんたは！」

そう言って墓を掘り起こそうとする。

「ちょっと待ち。墓を荒らすのはやっぱダメでしょ」

「なんでだ？こいつは大勢の人を殺した奴だぞ。そんな奴を丁重に扱う必要なんてないだろ」

私は、自分でもなぜかキレた。

「そんなことしちゃ、あんたも魔王のこと悪く言えないだろ！それ

に、こいつは一応魔法に関しては、私の先生にもあたるわけだし、この世界に来てから始めて殺したのがこいつなんだ、弔ってやるのが筋だろ？それに、金ならこれで十分手に入る」

そう言って、私は手に持っていたローブと杖を差し出した。

とたんに、グレの目の色が変わった。

「おい、その杖の先にはまっているのは、それが魔王のコアだ！」

「え？なんで心臓がこんなところについてるんだ？嘘は止めてくれ」

なんで石ころみたいなものが心臓の役割を持っているのかわからないが、魔力が血液の代わりをしているとか何とかそういう事情があるんだろう。

なのに、それが外についているとか、甚だ論外だ。

「嘘じゃない！コアが外についているなんて、不死な魔獣か、コアからの魔力に頼らなくても生きていけるような環境下か、死んだ体を誰かに操られて動いているかぐらいしかあり得ない！」

「結構いろいろ手段はあるんだな、おい。こいつは死んだんだから

一番初めの選択肢はナシだな。で、ほかの可能性は？ここが魔力豊富な土地だったとか」

なんだか、元の世界でもやたらパワースポットとかが流行ってたな。

「その可能性は、ない。おもな魔力を含む土地はすべて人間が押さえてあるし、魔王だけじゃなく僕らも魔法を使いやすくなるんだ、それなら僕らだってわかる。あとは活火山とか、空に高くなるほど魔力は濃くなるらしいが、ここはそんなに高いところじゃない。あの魔王が人並み外れた強さを誇っていたわけでもない。僕が見るところ、逆に弱い方の部類に入る程度だろう。となると、残る可能性は、誰かに操られているぐらいだが・・・これもかなりあり得ないからな」

ええーい、男がいちいちうるさい！

「そんなのどうでもいいじゃない、とりあえず戻るぞ、任務完了の手続きをして、この杖は・・・私が貰っておく。ローブもな」

ちゃっかりとすべて一人占めしようとしたのだが。

「なんでだ！僕によこせ！分け前は普通半々だろうが！」

「うるさい、ほとんど何の役にも立たなかったくせに」
「道中技をいろいろ見せてやったじゃないか！」
「ああ、だからゴブリンたちのコアと、報酬の四割はやるよ」
「なぜに四割！そこは君が四割っていうところじゃ？？？」
「ほー、今のは冗談で、八割はあげてもよかったんだがな、じゃあ六割で決定な」

ひでえ・・・・とかつぶやいているが、それでも一人じゃまず稼げないような大金だ、〇（ゼロ）よりはましだろう。

そして、自分だけ、覚えたばかりの転移で帰った。

「あら？おかえりなさい。途中でひきかえしてきたの・・・・かし・・・・・ら・・・・」

私の着ているぼろぼろのローブと、手に持った杖についているコアを見て、受付嬢の顔がだんだんと驚きで彩られていく。

「ああ、この二つは換金しなくていい。代わりに、しばらくしたら来るだろう、グレネスタに今回の報酬を六割やってくれ。ついでに

あいつの持っているゴブリンのコアも換金頼む。相場は分からないが、かなりの量になると思うぞ」

このとき私は知らなかったが、残されたグレは、あたりに魔王を討伐に行った人が持っていたと思われる、（おそらく、雑魚いくせに自分を強いと思い込んでいる貴族の坊ちゃんとかだろう）宝飾過多の剣とか、魔王が奪ってきた宝石や杖、などなどを見つけて、ほくほくとしていた。

なんでも、この辺の村や町の長たちが、集まって資金を出したらしく、報酬の額は金貨千枚。

私がもらった四百枚だけでも相当なものだ。（六千万ですよ！）

それに、私の着ているローブは、普通の（この世界でいう勇者ぐらいのなら）魔法を跳ね返す効果付きで、保温性も抜群、肩のあたりにはかたい金属がついているらしく、剣で切られることもない。

ところどころ破れてはいるが、いっそのこと、剣で切って普通の服みたいに仕上げてみた。

最後に横に払ったところがいちばん損傷が激しかったから、切り離してスカートと上着のようにしてみたのだ。

漆黒の服はまるで喪服みたいだったが、私の好みにはあった。

それに杖を合わせれば、国一つ売っても手に入らないぐらいの価値はある。

魔王のローブに杖なんか、どれだけ出回っているというんだ。

「たっだいまー！いやあ、お金がたまったたまった。六百枚も金貨を貰っちゃったよ・・・（九千万）それに、いい剣とか防具とかしまいには強力な魔剣も二振りあったから、いただいてきちゃった。ひとつは君に渡す。杖だけじゃ心もとないでしょ？それに毎回毎回僕の剣を使われるのも嫌だしね」

途中までは、え？なんでそんなものを？で、そして「ああそうか、ほかの勇者とかの装備をちょろまかしてきたんだな」と理解し、「え？魔剣って、あの何回かにも高そうな感じの剣だよね？ファンタジーとかによく出てくる。そんなんくれんの？この人なら両方持っていきそうなのに。意外と優しい？」と思い、最後の最後に聞き捨てならないセリフが。

「ちょいまてぃ！何か？これからもお前と一緒にパーティ組んで仕事しろと？御免こうむる！」

「なんでって、君まだこの世界の常識なんてほとんど知らないじゃないか。一人で生活できる自信とかあるのかい？勇者として王に呼

ばれるまでは、ゆーっくり過ごしなよ」

「遠慮する。剣はいただいて行くけどね、ばいばーい」

なんでこんな変な男と異世界ライフを送らねばならんのだ。訳が分からない。

私はあわてて、今までいた宿を後にした。

「待て――――――――――――――――!　逃がすか金蔓!」

「誰か金ヅルだ!　お前にはもうびた一文やらん!」

こうして、鬼ごっこは次の日の朝が来て、魔王討伐の知らせが王宮に届くころまで、およそ十時間、徹夜で続けられたのであった。

第４話　魔王の秘密を暴こうぜっ！（前書き）

この話は、番外編ですので割合早めに完結すると思いますっ！

ではどうぞ！

第４話　魔王の秘密を暴こうぜっ！

今、私は図書館で文献をあさっています。そして隣には悲しいことに、グレがいます。

何とあのあと、町の長さんがお礼をしたいと晩餐会に招いてくださり、何か希望はないかと言われたので、「とりあえず、文字を覚えたい」と言ったら、アルファベットでいうＡからＺまで、直々に教えてくださりました。

もともと、聞くのは問題なくできているので、文字の情報がわかれば後は普通に読めるようになっちゃいました。

で、本を漁っているわけです。

この図書館も、町一番大きいところで、しかも普通は入れないようなところにまで入れてもらっています。

ここで魔王に関して得られた情報が。

過去、魔王と呼ばれた存在は全部で六人。

火と雷をおもに操る魔王、水と熱を得意とする魔王、光と聖の魔法を得意とする魔王?、闇と風を生み出す魔王、悪と地の魔法を操る魔王、毒と氷を思いのままに動かす魔王、の六人だ。

ちょうど一人二つずつ、得意な属性を持っていて、みんな合わせて十二の属性亜属性を使えるというわけだな。

特殊能力は一覧になっていなかったが、≪完全防壁≫≪肉体強化≫≪瞬間転移≫≪魔力強化≫≪精神操作（マインドコントロール）≫≪無属性術（エクシード）≫があるらしい。

「完全防壁」はすべての魔法攻撃を、本人の持つ最大魔力以下の出力のものなら跳ね返し、「肉体強化」は魔獣の中でも最高の運動能力や肉体能力にまで自分の基本能力を上げることが可能になる。「瞬間転移」「魔力強化」は文字通り、「精神操作」は他者の脳を操り、思い通りに動かせる。が、これも技を使う本人より弱い相手じゃなければ駄目。「無属性術」は、魔力そのものを操り、魔力弾を飛ばしたり、物を自分のところに呼び寄せたり、無形の振動波などで周囲を根こそぎ攻撃したりと、一番手ごわい能力だ。

そして、魔王を束ねるさらに上の実力の持ち主は、六人の魔王すべての能力を持ち、すべての属性、亜属性の魔法を、それぞれが得意な魔王以上にうまく操り、さらに固有の能力まで持っているとか。

通称、「魔覇帝」。

私がすべての魔王の力を奪い取っても、その固有能力が何か分からない限り、勝ち目は薄いし、分かった所でそれを破る術がなければ意味がない。

「気が遠くなる・・・・・・・・・・・・・」

私が逃げた後、驚異の脚力で追いかけてきたグレにつかまり、あんな遅い時間に女が一人で歩いてたら、怪しまれて身分を聞かれ、それにうまく答えられなくて地下牢に入り、それからそれから・・・とおっそろしい話をみっちりと聞かされた。

最悪、私が勇者です！って名乗り出ればいいのだが、それはやりたくないので遠慮する。

て言うわけで、いやいやながらもこいつに付いていくことになった。

小説やアニメ、ドラマの世界なら、このあと私とグレがお約束的に結ばれてハッピーエンドなのだろうが、まずそれはないな、と思った。

そうなるぐらいなら、さっさと元の世界へ帰る方法を探しに一人で旅に出る方が考えられる。

「しかし、この大陸に存在する六つの国すべてに一つずつ魔王がいるなんて、少々不自然じゃないか？各国の形も整っているわけじゃないし、こんなぎざぎざな縄張りみたいなものがあるわけないし、しかも魔王の目撃情報のあった位置をすべてつなぐと、ちょうど綺麗な円になる・・・なんてねぇ」

元の世界のアニメとかなら、それこそこの後の展開がおおよそ決まっている。

謎を解いて、敵にそれを言い放って（おもに見ている読者や視聴者のために）、最後は倒して終わり。

だから、私も予想ぐらいはできるが、まだそっち方面の知識はないし、安易な決め付けは真実を見損なう、大きな原因だ。

「ああ、確かに怪しいな。ま、とりあえず次の国に行って、軽ーく魔王を討伐してこよう。君が使えるのは、瞬間転移と火、雷の魔法だから、水と熱の魔王のいる、「ウンディーナ連合市国」がいいかな、相性から見ても」

今ここは、「パイロキネシース王国」。

名前の付け方が安直だろうぅぅぅ！

ウンディーネは水の精霊として有名だし、パイロキネシスって言ったら発火能力のことだろ？

そして、この国の魔法使いは、大半が火属性。

ほかの国の地図も見てみたが、シルフィスにデスナイトに、アースにホーリースフィア？まんまその土地にいる魔王の属性とかぶっ

てる！

そしてその六つの国の真ん中にあるのが、すべての属性の人種が混ざっているところ・・・。名前はナシ。

やれやれ・・・。突っ込みどころがありすぎてもう疲れた。

「こういうとき、瞬間移動の能力って便利だなっと。移動に時間かける必要もないし、途中で厄介事に巻き込まれたりもしない」

ただ、さっきから何となく釈然としない気分が続いている。

「そうだな、一度行ったところしか行けないとか、そういう制限も付いてないし、次々と稼げていい」

ちなみに、もうギルドによるのはやめにした。

直接、魔王のいるところの近くに行って背後から不意を打つ。

「稼ぎたいなら、ギルドにでも行ってきな。私は当分、金貨四〇〇枚で十分だ！」

「・・・・・・釣りだしてくれる店が少ないのが難点だがな」

それを言うな！毎回、何とかして金貨一枚分の値段分ぐらいは買って、つりが出ないようにしなきゃならないんだ。

リンゴ一個だけ買うとか、そんなことはできない。普通の店に行って金貨で払うなんて、うまい棒一本買うのに一万円札を出すようなものだ。

ましてや、よくある王の悪政によって、税金で金が足りない国ならなおさらのこと。

「よし・・・・・・・≪転移≫」

視界がぐるぐると回転し始め、体中の感覚という感覚が消えた。

そして、今度着いたのは、からからに乾いて、草一つ生えていない、焦土に到着した。

地図の緯度や経度から、魔王の目撃点付近に転移しているのだが、水か熱の魔法を使ったのだろう、あたりの空気は乾燥していて、ひび割れた地面と、あるもの以外見当たらなった。

かろうじて遠くの方に、国や町らしきものが残っている。

おそらく、外郭を一面焦土にすることで、ほかの国との交通をしにくくしたかったんだと推測できる。

しかしこれは・・・

私は、口元に手を当て、必死で吐き気をこらえた。

そう、目の前には大きいものから小さいものまで、焼死体があちこちに散らばっていたのだ。

「これは・・・うちの近くの魔王がいかに甘かったのか、思い知らされたな」

それはそうだ。

パイロキネシース・・・めんどいから火の国でいいか。の魔王はあまり人殺しをこのんでいなかったように思う。

勇者や討伐隊の皆さんを返り討ちにすることはあっても、ここまでむごたらしいことはしなかったはず。

「今度ばかりは手加減なんてしてられない・・・全力で殺す。それ

でいいな、レイル」

確か初めて、名前で呼ばれたが、そんなのは些事だ。

「そうだな、グレ。ていうかお前じゃなく本気でやるのは私だが、お前も自分の持つ全力を使って、援護を頼むぞ」

そして、同じ魔王同士、何かつながりがあるのか、魔王のコアが示す方向に私たちは歩いていった。

「ついでだ、他のところの魔王をもう一人、ここに連れてきてやろう。魔王同士の仲は悪いみたいじゃないか、奴らにやり合ってもらって、衰弱したところを仕留めるぞ」

グレもしっかりと頷いたことだし、私は次のところ・・・光と聖の魔王の眼前に転移した。

そして初めて聞いたものは・・・

グオオォォォォォ

いびきの音だった。

なんだ、寝てるのか。と思ったが、それはそれでこの周辺の危害が少ないことを表しているのかもしれず、ほっとした。

「起きろ！他の魔王に侵攻されてるぞ！」

叫んでみたが、反応はないようだ。

「≪堕天使の業火≫」

魔王のいる洞窟の中を焼いてみたが、暑そうに身じろぎしただけで、あまり効果はないようだった。

・・・・・・かなり手ごわいんじゃないか、こいつ。

しょうがない、元の魔王の眼前に、ここの魔王だけを転移させ、私は少し離れたところにいるグレの隣に転移する。

こういうところが、我ながら義理堅いんだな、と思ってしまう。

「おい、貴様。こんなところで何寝てる！ここは私の領土だ。荒らさないでもらいたい！」

「ｚｚｚ・・・？ん～よく寝た。なに？君はもしかして、水と熱の魔王？なんで君がここに？」

「こっちが聞きたい！出て行け、さもないと攻撃を仕掛けるぞ！」

「んー。眠いから動きたくない、ヤダ。・・・・・君と戦う方がマシ。行くよ」

「ふんっ、上等だ、この数百年間、寝てばっかりいた貴様に負けるはずがない！」

こうして、魔王対魔王の戦いが今始まった。

実況をグレでお送りします！なんちて。

「おいおい・・・ほんとに始まっちゃったよ」

グレの突っ込みが、多分普通の人の反応だろう。珍しいことに。

「せいやっ！」

「はあっーーー！」

光でできた槍と、水で作られた長剣が、魔王ならではの筋力によってかすむほどの速さで振られ、空中でぶつかった。

派手な音こそ出なかったものの、水しぶきが舞い、光の刃が少し欠けた。

「僕の能力は≪肉体強化≫。怪我しないうちにやめた方がいいよ」

光の槍が、そのまま魔王の胸に向かって突き出される。

その高速の動きは、人間ではもう確実に対応不可能。

「ぐはっ！」

水の方の魔王の体に、あっさりと大穴があいた・・・かのように見えたが、すぐにその魔王の体が液状となって崩れ落ちた。

「分身っ？」

そして、慌てている光の魔王の無防備な背後から、長剣が襲いかかる。

が、こっちは光の屈折率を変えていたらしく、少しずれたところにいた本体は、全くの無傷だった。

「やれやれ、君も少しはやるようになったねぇ」

「当たり前だっ！前に貴様に殺されかけて、魔王の座を奪われたこと、まだ忘れてないぞ！その貴様が、火と雷の魔王に敗れたこともな！」

そして、得意分野ではないはずの魔王の右手に、火球が幾つも生じる。

「これは≪堕天使の業火≫を改良したものだ・・・・・・喰らえ！
≪堕落神の恨炎≫」

それぞれが太陽と同じ様な温度を持った火球として、順番に何発も連続して光の魔王に襲いかかる。

それを見ても光の魔王は涼しい顔のまま、シールドを展開した。

いくつもの火球が爆着し、シールドを壊さんとまだまだ殺到する。

聖の魔法によって生み出されたシールドは、ほかのすべての亜属性に対して有利に働く。ただし、悪の魔法には何の抵抗もできずにやられてしまう。それがルールだ。

ちなみに、光はすべての属性に強いが、闇にだけは負ける。そして闇と悪はほかの四つずつに対してはあまり強くない。そういう仕組みになっている。

よって、聖の魔法のシールドを破るには、他の属性の時以上に威力を求められる。

なのに、自分の得意じゃない属性で挑むのは不利！と思ったのか、水圧を極限まで高めた、ウォータカッターの特大サイズバージョン

を、天空から発生させる。

「これもまた、オリジナルだ。≪水刃襲撃≫」

ネーミング的にはしょぼいが、威力は十分。

水の刀が斬撃を加えた後には、大きく地面がえぐれて、断層ができていた。その深さときたら、地下千メートルは優に越えているだろう。

が、この技の欠点は私でもわかる。

こんなの、後ろに飛んでかわせばいいだけの話。

ところが光の魔法の行動は、私たちと水の魔王の意表を突いていた。

前に飛び出し、水の魔王の間合いに入ると、光の短剣を次々と生み出し、投げつけながら接近し、最後に先ほどの光の槍を投げつけた後、投擲された槍と同じスピードで腕を横に動かした。

見るとそこには、光でできた剣が握られている。

全身に短剣を刺し、腹を槍で貫かれている水の魔王は、さらに光の剣で下半身と分断された。

もう、生きてはいられまい。

さすがに今回は分身ではなかったらしく、そのまま形を保って崩れ落ちた。

その上半分についた顔は、驚愕と怒り、そして警告で彩られていた。

「気をつけろ・・・恨みを晴らせ・・・・」

それが、水の魔王の最期のセリフとなった。

その警告が、人間に対する恨みを持った光の魔王への警告なのか、自分を殺した光の魔王に対する警告で、私たちを見つけて発したものなのかはわからない。

でも、その目線の方向に自らも顔を向けた光の魔王は、簡単に私たちを発見することになった。

「やあ、君たちは人間かい？僕の名前は知らないだろうけど、言っておくよ。――――光と聖の魔王、ルシファーだ。君たちは僕に危害を加える気があるかな？剣とか杖を持っているようだけど」

いえ・・・・遠慮します。と言いたいところだ。

火と雷の魔王なんかよりも圧倒的に強かった水の魔王を、熱の魔法を使う前の段階で、しかも無傷のまま滅ぼしたのだから、そんな奴に勝てるわけがない。

でも、口は勝手に動いていた。

「貴方個人に恨みはないけど、私は魔王を滅ぼすために無理やり異世界から連れてこられた。いくら元の世界に戻る方法はないとはいえ、この世界の人を魔王から救うのは私の役目。だからやらなきゃいけない。・・・・・・勝てるとは思えないけど」

正直に言ってみた。というかかってに言っていた。

さて、怒られるだろうか・・・・・・？

すると突然、笑い声が聞こえてきた。

「あーはっはっはっは！君面白いねぇ。普通なら、『いえ、なんでもありません。私はこれでっ！』って言って逃げるか、『魔王め、お前を殺す！』とか言ってとびかかってくるのに。君は勇者だろ？確か今回の火の国の勇者は、人違いで連れてこられたらしいけど、君のことかな？」

「そうです。わかっているならおとなしく投降し・・・ましょうか？」

後ろでグレがずっこけているが、しょうがない。

命は惜しいんだ！

「いや、君の仲間になろう」

「・・・・・・今何と？」

第４話　魔王の秘密を暴こうぜっ！（後書き）

はい、仲間が増えましたね。

多分、あまりここからは異世界魔法騎士の方とリンクしないと思いますが、多めに見てください。

最後の方でつながりますし！

また明日から学校なので、更新はいつになることやら。

ではさようなら！次の更新までの間に、「最強最弱の異世界魔法騎士」の方も読んでおいていただけると嬉しくて作者はパソコンの前で阿波踊りを披露しますｗ

第5話　なぜか素直に喜べない・・・

「え？？？」

仲間になる？正気かこの人？

元仲間の魔王裏切るってことでしょ？

それに能力だけ見せてくれたらいいんだけど！

「だって、仲悪かったんだもん、今の魔王たちと。一番上の魔覇帝もなーんかねぇ。平穏に暮らせばいいのに、わざわざ無駄に人間殺したりして・・・ほんと、ばっかじゃないの？幼稚園児でも人の迷惑にならないように暮らすのに」

うーん、言っていることは全く間違っていないんだけど。

いや、幼稚園児は世話してもらわなきゃならないけど、て言うか幼稚園とかあったんだ、とも思うけど突っ込むところじゃあるまい。

なのに何か釈然としない・・・

「えーと、残る魔王は、闇と風を生み出す魔王、悪と地の魔法を操る魔王、毒と氷を思いのままに動かす魔王ですが、協力してくださるんですか？」

「うん。だからさっきからいってるでしょ。ほら、君も転移能力使えるんだろ？次、早くいこう。それに、どうやら見た能力を自分のものにできるみたいじゃないか。僕の必殺技とかも教えてあげるよ・・・魔覇帝も知らないようなのをね」

マジですか！

こうなりゃもう本気だと認めざるを得ない。

相手が本気なら、こっちに断る理由はない！

大歓迎だ！

「喜んで！あ、さっきの水の魔王の特殊能力はなんだったんですか？」

「魔力強化、最もゴミな能力だね」

確かに、それならいらなかったかもしれない。

魔力に関しては、どうやらチート的な仕様になっていて、ほぼ無制限らしいから。

「じゃあ行きまーす」

またもや、気持ち悪い感覚とともに、違うところに立っていた。

今度は、夜の森みたいなところで、上空を蝙蝠が舞っている。

ここでフクロウの鳴く声とかも聞こえてきたり？

・・・・・・さすがにお約束はないようだ。

「もう分ると思うけど、次は闇と風の魔王のとこ行くよー。ていうかもう着いたけどね」

目の前には、ものすごく巨体の大男が座っていた・・・いや、鎮座していた。

「起きろー！≪昇華の聖光≫」

目を焼くような閃光が走り、巨人を攻撃する。

「ｚｚｚｚｚ」

「「今ので起きないのかよ！」」

私とグレは全身全霊の力を込めて突っ込んだ。

「≪闇の触手≫」

げ・・・光剣に闇の魔法を付与するっていいのか？

「ついでだからつけとくねー。炎に水に風に雷。聖の属性もおまけで」

私も、その光剣に自分の魔力を流し込む。

「あ、サンキュ。じゃ、行くよー」

ズバッ！

なにもない空間を光剣が薙ぐ。

――――――――素振りでもしてるのか？

「グッギャォッォォァァァァァァァ！」

次の瞬間、巨人の右肩から腕が外れ、地面にぼとりと落ちた。

切断面からは、千切れた神経やら骨やら血管やらが見えていて、何とも痛ましい。

ついでにそこから流れ出る血の量が半端ではなく、すでに池ひとつ分ぐらいは流れてるのではないかと思うぐらいだ。

「君、のろいんだよ。十秒もかからない・・・が、能力見せなきゃならないんだったな・・ま、いいよね！最終的に魔覇帝倒せれば！」

待て待て待てぇい！

ちょっとは敵にも攻撃させてやってくださいお願いします。

「こいつの特殊能力、エクシードだよ。無属性術ね。だから・・・こんな感じっ？」

ちょうど光魔王がしゃべっていたあたりの土がめくれ上がり、浮遊しながら巨人の周りをぐるぐると回りだした。

そして、一気に尾を引きながら、すべて的確に光魔王をねらってきている。

「浮遊術とかに見えるけど、エクシードの効果には間違いない・・・だから、これでもういいね？」

いやー、よくないんですけどもー。

なんて言えないので、わたしは口を開かなかった。

そうしたら、沈黙を了承と受け取ったのか、軽くうなずくと、肉体強化によってありえないほどのスピードで飛び出していって彼は、そのまま、左肩のほうを一閃。

彼が通過した後、なにもない上空で反転して戻ってくるまでの間に、左腕ももぎ取られる。

「最後は頭だよっと！」

ここから先は、ご想像にお任せしよう。

脳天にいろいろ付与された光剣を、ぐさりと刺すだろうと思った私は、思わず目をそむけていたからだ。

それでも、脳天から噴き出した血泉は、私の頭の上にも降り注いだ。

グラッと巨体が傾いで、ゆっくりと倒れ行く。もちろん、両肩と頭から血を噴き出しながら。

「さて、一丁上がりっと。次は？」

「毒と氷で」

「あはははは・・・・どうせ僕なんか・・・放っておかれてるんだし・・・・・・」

あれ？グレがすねているようだが、まあこいつは放置でいいだろう。

ちなみに、ちゃっかり水の魔王と今回の魔王のコアを手に持っているところがいやらしい。

しかも今回のは倒したばかりなのに、それはそれでなかなかやるなと言わざるを得ない。

「よっし、転移だ転移！」

またもや目の前がぐるぐると渦を巻き、気持ちの悪い、いくらやっても慣れない感覚が襲ってきた。

これさえなければ、もう歩くこととかしないんだけどなー。

「よし、今度は君からやってくれ」

え？まあそりゃ私の旅だからね。

「了解。闇の触手もらえる？」

「ほい。逝ってらっしゃい」

なんか字が違うんですけど？

まあ、とりあえず（また眠っている）魔王のもとにこっそりと忍びこむ。

そして、手にした魔剣を大上段から振り下ろす。

間合いが限りなく伸びたこの剣の攻撃は、一〇〇メートル離れたところにいた魔王にぶつかり、霧散した。

「え？」

しかし、こちらの攻撃が効かなかったとはいえ、相手を起こすには十分だったらしい。

「ワレノスイミンヲジャマスルモノ、コロス」

今度は片言の魔王か！いろいろと種類が豊富だなこの野郎！

「そいつの能力は、完全防壁。魔法攻撃は全く効かないとみていいよー」

「それをっ！さ、先にーっよっと。言え――――――！」

しゃべっている途中にも、後ろから氷の槍がいくつも打たれているから、上がった身体能力でよけながら叫んでいた。

「能力見る機会を作ってあげたのさ！だって、こいつ、目が悪いから・・・≪昇華の聖光≫」

健康な目の持ち主の私は、突然目の前に迫ってきた閃光によって、一時的に何も見えなくなった。

「わっ！ちょっちょっちょ！あぶっ！≪完全防壁≫！」

何も見えないまま走るなんて言うのが、どれだけつらいか、みんなも試してみるといい！

しかも後ろから当たったら即死の攻撃が飛んでくるんだ！（当然、飛んでくる槍には毒が付与されている）かなり怖いんだよこの状況！

「さて、僕も必殺技でも出しますか・・・『光、我のもとに集いて敵を滅ぼす槍となす、聖力、我のもとに集いて敵を焼きつくす刃となす。集まりし者たちよ、今我の命にて敵を打ち滅ぼさん』」

「長いわ――――！」

「さて、これが必殺技その一だ。≪神器解放≫」

轟音とともに、わたしのすぐ横を、おびただしい量の光線が飛び出していった。

なにも見えなくても直感でわかる。かすった瞬間、私全体が蒸発するぐらいの熱量を持っている。

いくら完全防壁があるといっても、少しでもつまずいたりしたら、安らかにあの世にいける自信があるな。

「危ないもん出すな――――――！」

「『第二幕、聖力集いて我の力となす。光力集いて我が物となす。

電力集いてここに具現せよ』――――≪電神波砲（レール・バズーカ）≫」

あ、これは知っている。

元の世界でも最近開発された、超大型兵器、電磁波砲・・・通称、レールガン。

弾丸に高電圧をかけて、普通の銃の何倍も高速で打ち出す兵器だ。

電力の関係で普通は超大型兵器になるのだが、それをどうやって携行できるサイズまで持っていくのかが今研究されていた。

しかし、今のは何か、もっとこう違う感じがする。

普通のレールガンよりも、さらに威力が高く、範囲も広い気が。

まだ私の眼は回復していなかったが、それでもどのぐらいの威力だったのかはわかった。

ドッゴォォォォォン！

先ほどの轟音を、音響効果抜群のドームで、さらに拡声器まで使って、それを何倍にも大きくしたような爆音がした。

「『第三幕、光刃、聖槍、雷剣、あらゆる魔具よ、すべて我のもとに集い、敵めがけてその力を撃ち放て』――――≪絶対斬劇≫」

「伏せろ！『終幕、今までのすべてを超える力よ、魔覇帝をも打ち滅ぼす力よ。ここに今、我のために具現し、汝が敵を葬りたまえ』――――≪終焉ノ砲撃（ジ・エンドオブバースト）≫」

空気を切り裂くような音とともに、後方で何かが切り刻まれるような気配があった。

そして、そのすぐ後に、言われるがままに伏せた私の頭上ぎりぎりを、ぶっとい純粋な光線が、通過していった。

あれをくらっては生き延びられる者などいなさそうだ。

「ふう・・・今ので十分だろう」

「当たり前だ！私まで殺す気か！」

光線が通過した瞬間、発生した風や静電気によって私の髪の毛が逆立ち、その先端が、ジュッという音とともに一瞬にして消滅していた。

伏せてなければ、消滅していたのは髪ではなく、私全身だったかもしれない。

ていうか、確実にそうなっていたはず。

そして、敵は一回も攻撃をしなかった。よって結局、魔法を見ることは叶わなかった。

「まま、残る一人を、ちゃっちゃっと討伐しちゃおうよ。日が暮れるまでには魔覇帝のもとに着きたいからね」

ちなみに、今の時刻はちょうど正午ぐらいだ。

転移を使っても・・・いや、どうせ侵入よけの結界かなんかがあるんだろう。

「了解。じゃ、最後の魔王のもと行くよ―」

転移の時の様子は、もうくどいくらい書いたからいいよね。

今回は、なんだか辺りがすごく・・・真っ黒だった。

「さすがは。今の人間が抱いている魔王像は、全部この魔王のものだよ。純粋な『悪』の魔王だからね。趣味は人を殺すこととかいう、ちょっと変わった魔王だよほんとに」

後ろでは、三つの魔王のコアを持ったグレが、舞い上がって踊っている。

ついでに、すべての魔王から、使えそうな（もしくは売れそうな）お宝を奪ってきたらしい。

両手が荷物でいっぱいになっている。

情けない・・・

「精神操作の能力は、君には見せられないね。魔覇帝を討伐するのには必要ないし、勇者とはいえ人間が持つには強大すぎる力だ。その気になれば、各国の首脳を操って、全面戦争だって起こすことができる。そんな危険を冒させるわけにはいかない。それに、あの力を持つ人間は、必ずと言っていいほど野望に燃え、身を滅ぼす結果になる」

確かに。

「まあ、君にはそんな心配ないだろうけどね。まあどうしてもほしくなれば、魔覇帝の固有能力の一つ、『死者蘇生』を使って呼び戻して、能力を見せてもらえばいい。じゃ、行くよ。今度の魔王は、

かなり手ごわいから、二人がかりでいくよ、もう少し遠くにい・・・
」

光魔王のセリフが、途中で遮られた。

「いやいや、その必要はない。君たちが今、魔王を殺して回っているパーティだな？裏切り者も混じっているようだが」

「お、久しぶりだねー。さっそくでなんだけど、おとなしく降参してくれないかな―？無駄な争いは避けたいし」

「それは無理な相談だな・・・では、参る！」

「やれやれ、喧嘩で僕に勝ったことないくせに」

「では今回こそ・・・汝らを滅ぼす！」

第6話　さて、そろそろクライマックスかな？

「では今回こそ・・・汝らを滅ぼす！」

「あー、名前だけ聞いておいていいかな？」

こういったのは私だ。

いい加減、光魔王とかそういう呼び方は飽きてきた。

「ただの人に名乗る名などない。――――すきに呼べ」

「そういうのが一番困るんだって、習わなかったのかな！？」

「あ、ちなみに僕の名前は、ルシファーね。まだ名乗ってなかったなぁ。アハハハハハ」

「下らん会話は終わりだ！」

一番初めに動いたのは、なんと私だった。

腰に差していた剣を抜き、そのまま魔力を乗せて一閃。

エクシードを使い、軌跡に沿って衝撃波を放つ。

これは魔法じゃないから、対魔法シールドで防ぐのは不可能。

「ほお。あいつのお得意技だった、「見えない斬撃」か。なかなか粋なものを使うじゃないか」

しかし、防げないのは熟知しているらしく、上空に飛び上がる事でかわされた。

「よし、潰れろ。≪地獄への葬送≫」

悪系魔法か・・・ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！

上空に立ちながら、右手を突き出してガトリング砲のように黒い光線を放ち続けている姿は、本当に魔王らしかった。

「ふっ。パロディかい？情けないな・・・≪天国への葬送≫」

今度は、地上にいるルシファーの前面から打ち出される、光の光線が全て迎え撃つ。

「何とでも言え。力が全てだ、この世界は！――――≪永夜の眠り≫」

なんだか分からないが、「アバダケ〇ブラ」みたいな魔法だということは直感で察した。

よける間もなく、漆黒の閃光が私とルシファーめがけて飛んでくる。（ちなみに、グレはきっぱりと無視されている）

やられるっと思い、わたしは目を閉じかけたが、そういえば完全防壁があるんだった、っと思いだしたころには、自動的に発動した、半透明の障壁は、黒い光線をさえぎって、プルプルと震えている。

なんか、やばい気がするっ！

私が、真横に跳んでよけるのと、シールドが破れ、黒い閃光がさっきまでいたところに突き刺さるのとが同時だった。

それを見たルシファーが、静かに告げた。

「僕が、魔王の中でも異端と呼ばれている、そのわけを知っているかい？」

それはおそらく、魔王（残るは、ルシファーとアレだけだから、区別はもう着く）と私の両方に向けて言った言葉だろう。

私と魔王は、仲良く首を振った。

「実はね・・・・・・こういう魔法を使えるからなんだよ。≪魔戒光牢≫」

ルシファーが唱えると同時に、蒼天から幾筋もの光の筋が降り注ぎ、正方形の牢屋の中に魔王を捕えた。

「この空に浮かぶ牢獄の中では、魔法が使えない。剣技が苦手な魔王は、この中では無力だ。・・・チェックだな」

魔法が使えない魔王は、もう魔王とは呼べない。

「くそっ・・・・・・！」

「大人しく投降・・・」

危ないっ！

私は、直感でそう感じた。

その時、魔王は、ニヤッと笑って言った。

「チェックメイトにはまだ早いぜ？」

瞬間、ルシファーの腹を、魔剣が貫いた。

第６話　さて、そろそろクライマックスかな？（後書き）

今回は短いです。

あと、この話は、１０話前後で完結します。

第7話　私、ついに人外へ突入！

「馬・・・鹿な・・・・・・あ、そういや、君の能力、精神操作だったねー。いやー参った参った」

見ると、グレの魔剣に刺されて倒れたはずのルシファーの体が、うっすらと輝いたかと思うと、黄金のいくつもの粒と化し、宙に消えた。

「なにっ！確かに、致命傷だったはず！」

魔王さんも、大慌てである。

私も、ポカーンとしているし、皮肉なことに、精神操作で操られていたグレが、一番まともに見える。

「光魔法は非常に便利でね。自由にアレンジできるようになると、いろいろとやれることが増えるんだぁ。たとえば、『屈折率を変えて、幻を見せる』とかね。光と熱の魔法を組み合わせたら、可能なんだよー。ってわけで、バイバイだねー。今回は喧嘩じゃない。試合でもない。・・・殺し合いだよ。半殺しや気絶じゃ済まない。それは君もわかってたはず」

ちらっとルシファーは私の方を見た。

もう、見学は十分か、と言いたいんだろう。

私も、頷きを返す。

「終わりだ。≪電神波砲≫」

例の光線がほとばしり、光牢に閉じ込められた魔王の体を焼いた。

「ふう・・・」

ルシファーの額には、玉汗が浮いていた。

それもそのはず。さっきの魔剣、本当に刺さっていたのだから。

・・・・・・・

・

あの瞬間、倒れたように見せかけたんじゃない、倒れてないように見せかけたんだ。

魔法の中には、幻術だってある。「光属性」の魔法に。

回復術は光、風に属するから、ルシファーの得意分野なはず。

だから、刺された瞬間自分を治療し、死を免れた。

そして、こっそりと詠唱をし、あの電神波砲を発動した。

「大丈夫？今剣を抜くからね」

ルシファーに駆け寄った私は、刺さった魔剣を抜く。

とたんに血が噴きあがるが、それは治癒魔法で瞬く間に直された。

剣が刺さっているときは、完治させる治療は無理だが、剣さえ抜けばもう傷なんてあっという間にふさがる。

が、流れてしまった血は戻らなく、ルシファーはそのまま出血による血液不足・・・・・・貧血で、倒れて意識を失った。

ルシファーを抱えた私・・・の、連れのグレと一緒に、パイロキネシースに戻ると、槍や剣を構えた衛兵たちが、私たちを取り囲んでいた。

「おまえは、勇者か？」

なぜか、私の方を向いて、衛兵Ａが言う。

「いえ、人違いです。この隣にいる、グレネスタさんが、召喚された勇者です。魔王のコアも持っていらっしゃいます」

隣のグレは、驚いたように目を見開くが、無視してすました顔で衛兵Ａの顔を見返す。

「嘘をつくな。今回の勇者は女だって聞いている。容姿も予言と一致しているな。よし、連れて行け」

衛兵ＡやらＢ一やらは私の腕をつかむと、ずるずると王宮へ引っ張って行った。

「勇者に対する扱いじゃないよね！確実にこれ！」

わめいてみたが、通用しなかった。

―☆―☆―☆―☆―☆―☆―

で、今私は、ほかの家よりだいぶ高い、城の最上階で、王の目の前にいる。

金髪碧眼で、かなり整った顔立ち（ナルシスト風味で私の好みからは遠くかけ離れていたが）をしていて、そこそこ若い様子。

「私に何の用ですか？」

「いや、とくに何ということもない。ただ、魔王はすべて討伐されたようだし、後はほかの国に就かぬよう、軟禁させてもらおうかと」

「ふざけんな！断る！」

「そうかそうか。なら即刻首をはねろ」

てな感じでハイテンポに会話が進んでいるのであります。

そしてこの一言は、私の堪忍袋の尾をぶった斬った。

治癒魔法をもってしても、戻る見込みはＺＥＲＯ。

「ざっけんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！やれるもんならやってみろ！」

私は一気にエクシードを開放し、半球状に広がった無形の衝撃波で衛兵ＡからＮぐらいをなぎ倒す。

「≪葬電の地獄≫！近づいたら葬るぞ！」

そして自身の周りに高電圧を張り巡らせ、寄ってくる兵士たちを牽制する。

さらに、どこからか飛んできたナイフを指に本でキャッチし、そのまま投げ返す。

飛んでいったナイフは、まさかキャッチされるとは思っていなかったのか、うろたえている兵士の喉元に刺さって、絶命させた。

「おいおい、国王よぉ。あんたは人を殺すのが好きなようだなぁ。ああ？なら試しに、やられる側に立って見やがれっての！≪電神波砲≫！消え失せろこのナルシストの自己中心的野郎が！」

迸る雷光が、玉座ごと王を消し飛ばし、後ろの城壁まで貫通して飛んでいく。

ここが普通の家よりも高い所でよかった。被害が最小限で済む。

つい、荒っぽい口調になってしまったが、そこはまあ気にしないでもらおうか。

そしてもうクソ王のことなど見向きもせずに、手近な兵士を一人捕まえる。

「おぉい、グレとルシファーの居場所を吐いてもらおうか。吐かなければ１００％死ぬ。吐いたら９９％の確率で死ぬ。どっちがいい？」

どっちもあまり大差ないが、ガクガクブルブルと震えているその兵士にとっては、１％は結構大きかったらしい。

「ち、地下牢にいる！二人仲良く、鎖でつないで同じ牢にぶち込んである！」

「わかった。もうひとつ教えろぉ。私を召喚しようとしくさったのは、どこのどいつだ？」

初めから、マインドコントロールで操ればよかったと思ったが、あの能力は一応使わないと約束してあるから、使わないが。

「そ、そこにいる魔術師たちだ！召喚魔法と呼ばれる昔の魔法の使い手は、もうあいつらしか残ってない！」

しゃべった兵士は、周りから白い目で見られていたが、この場合、こいつの方がまだいい運命にあっただろう。

「≪葬電の地獄≫≪昇華の聖光≫≪土槍≫≪氷槍≫≪風の刃≫」

自分がまとっていた電気をもう一度かけなおすと、私はすらっと剣を抜いて、先ほどの兵士を白い目で見ていた者たちを、順番に斬り飛ばす。

残像が見えるような速さで繰り出される剣撃を防げる者はおらず、またそんな速さで振り下ろされたり振り切られたりする魔剣を防げるだけの鎧を着ているものなんかもおらず、順番に鮮血を噴いて倒れていく。

近くから斬りかかってきたものは、私の葬電の地獄の電圧のせいで、剣から電気が伝わって、あっという間に焼死体と化した。

「か、≪火球≫」

「≪灼烈撃≫」

「≪百火繚乱≫！」

火属性のありとあらゆる魔法（指向性のあるもの限定。さすがに究極魔法とかを使う者はいなかった）が飛んでくるが、自動的に発動した≪完全防壁≫に阻まれて、私にかすり傷一つ、つけることはできなかった。

「おい、降参するものは武器を置いて両手を頭の上で組め。命だけは助けてやるぞ」

十人ほど斬り、魔法で二十人ほど葬ったところで、一応降伏勧告をしておいた。

百人ほどいた残りの衛兵たちのうち、二十人近くが大人しく投降した。

「残りは死にたいっていうことか？楽には殺さんぞ」

脅しをかけると、さらに三十人は武器を置いた。

「残りはほんっとうにいいんだな？殺人は好きじゃないから聞いておいてやるが、これで最後だぞ。おまえたちに勝ち目はない。残っていても死ぬだけだ。それに使えるべき君主もいない、ここは命を大事にした方がいいんじゃないか？それに、今なら王になれるかも知れんぞ」

最後に確認すると、残りの四十人が白旗を上げた。

「わかった。後の十人は――――」

私は高速で動き、固まっていた十人をまとめて斬り下げた。

「こうなる。よかったな、大人しく降参しておいて。そして、残った魔術師どもに質問だ。私を元の世界に返す方法はあるのか？」

「な、ないぃ！！いや、ないです！あったら今すぐにでも送り返してあげるんですが、ないんです。源龍が邪魔しているから――――――」

それを聞いた瞬間、さらに私の中の堪忍袋の本体が爆散しかけた。

が、源龍を問い詰めるのは後でもできると、私の中の理性が制止した。

そして、床を蹴って跳躍すると、最後にこう言い残して床に穴をあけて地下牢まで行った。

「わかった。次にだれが王になるのか知らないが、民にも良い施政をするんだぞ！搾取や強制労働、治安の悪化などが見つかり次第、また同じような悲劇が引き起こされると、肝に銘じておけ！」

その後、あそこの場にいた一番偉い誰かが王になったらしいが、その後王がいた期間の施政は、非常に民に好かれていた、そして王宮に空いた穴は修復されることはなく、いまだに空いたままで民の間では謎として、王家では悪政はならぬという戒めとされていた。ちなみに、あれ以降召喚の魔法の方法は、永遠に謎となった。

「おい、ルシファーにグレ！助けに来た・・・ぞーーー」

地下牢の付近に着地すると、二人は見張りの兵を気絶させ、廊下でミニ宴会を開いていた。

「てめえらいったい何やってんだーーーーーーーーー！」

その次の瞬間、天から飛来した火柱によって、今度は王宮の天井がぶち抜かれた。

すでに穴が開いていたため、今回の魔法による死者が０名だったのが唯一の救いだろう。

やれやれ・・・私もついに、人外になっちゃったな・・・・・・。

第7話　私、ついに人外へ突入！（後書き）

次回、魔覇帝討伐に移ります。
レイルの性格が崩壊気味ですね・・・

第8話　覚悟しろ、魔覇帝！（前書き）

本編の方で、いつの間にかＰＶ二十万突破（三万ユニーク）！
ありがたいことです。本当にありがとうございます。
現在、次回作の構想を練っている途中です。
またよろしくお願いします。

第8話　覚悟しろ、魔覇帝！

王宮で随分と手荒い歓迎を受けた後、目を覚ましたルシファーの案内で、私たちは魔覇帝のもとへと向かった。

当然、近くまでは転移で移動できたものの、そこからは少し先に、明らかに空気の感覚が違うところがあり、おそらくあの中に転移していたら、すぐに敵に連絡がいくか、もしくは消滅してたか、どちらかだっただろうと容易に予測できた。

「さあて、ここからは完全防壁を張っておいてね。雑魚どもにかまっている暇はないんだ。魔覇帝本人以外、取るに足らないやつばかりだけど、複数でかかってきたらうっとうしい、でも完全防壁を突破できるほどの力量の持ち主はいないから、安全だよ。物理攻撃でかかってくる敵は、僕とグレが斬り飛ばすから、君は防壁の維持に全力を注いで・・・は駄目だけど、破られない程度に頑張って」

オーケー了解。

「じゃあ、ここから先は、もう引き返せない。今僕たちが持っているのは、戦場までの片道切符だ。帰りの切符は、魔覇帝を倒さないと手に入らない。―――言うまでもないけど、覚悟はいいね！」

「「もちろん！」」

「なら・・・出発！」

そして、空気の違う空間に、私たちは足を踏み入れた。

―☆―☆―☆―☆―☆―☆―

「おらおらぁ！どけぇ！」

グレが叫んで、手に持った魔剣で辺りの敵を吹き飛ばしている。

どうやら、お宝を手に入れるためには、番人か何かを倒す必要があったらしく、腕が磨かれたとのことだ。

「はいはい、無駄な抵抗は止めて、大人しく投降してね」

降参しない敵には容赦なく、斬撃を雨あられとお見舞いしている

ルシファー。

「≪完全防壁≫」

私もシールドを維持しているが、もうまったく力を込めなくても、全然平気だった。

だから剣を抜いて、敵を切り払うのにも参戦している。

折り重なって襲いかかってくる魔獣や魔人なんかが、三人相手に苦戦・・・惨敗しているさまは、客観的に観察している者から見れば、瞠目に値するだろう。

光剣がきらめくたびに、二～三人の首が飛び、グレの叱声とともに三～四人が倒れ伏し、私の残像が見えるたびに、何人もがまとめてなぎ倒されていく。

魔法攻撃は魔力の無駄な消耗を防ぐためにしかけないが、たまに火球や氷が飛んでくるが、防壁にぶつかって霧散する。

そうこうするうちに、全七階層ある城のうち、第二階層までを楽

々突破していた。

さすがに三階からはそこそこ強い敵がいたが、今回は量が少ないため、また五階までは余裕で突破した。

「残るは二階層分か！」

六階へ上がる階段にいた敵を斬りながら、確認のために私は声を上げた。

スタミナは、全く減っていない。

「そうだな。六階は魔法でぶち抜いていくか。そこそこ強い敵がいるみたいだし」

気配を探っていたルシファーも叫び返す。

魔法の轟音と、剣と鎧がぶつかり合う音で、なかなかにやかましい状態なのだ。

「了解。グレ！よろしく！」

悪いが、勇者でも何でもないグレが、魔覇帝と戦う時にはあまり

戦力にならないと思う。

だからこういう時に、全力を発揮してもらっている。

ちなみに、素早い動きで倒した敵のコアを回収している彼を見て、半ば呆れかえっているのも事実だ。

「了解。≪百火繚乱≫」

火柱が昇り、五階の屋根、六階の床をぶち抜いて、ついに七階の床も焼き尽くした。

私とルシファーは地面を蹴ると、その勢いのまま跳躍し、飛翔魔法を使わないまま七階へ着いた。

グレはルシファーが抱えている。

そして穴を越えて、某アニメの主人公の必殺技、「アン〇ーンチ！」の恰好からバック転で床に着した。

そして、なんだか既視感があるが、玉座に座る魔覇帝の姿を目に捉えた。

「貴様が魔覇帝だな！覚悟しろ、魔覇帝！」

「ひっさしっぶりー！。じゃあ倒させていただくよー」

「なかなか金になりそうじゃないか、ああ？」

一人セリフが違う人がいるが。

漆黒のマントに漆黒の服、漆黒の玉座と黒ずくめの魔覇帝の姿は、なかなかに威容があった。

もっとも、私にそんなものは通用しないが。

「魔覇帝、殺人、傷害、殺人未遂、誘拐その他もろもろの罪によって、裁きを受けてもらう！ついでに私がここに越させたのもお前のせいだ！せいぜい八つ当たりしてやるから覚悟しろ！――――熱系オリジナル魔法≪アトミック・ボム≫！」

いきなり先制攻撃で悪いが、もともとそんな事を気にするタイプの人間じゃないんでね。

これでも原子力を研究していた身。オリジナル魔法が使えるなら、確実に攻撃方法に入れるさ！

当然、威力は加減するけどね。え？平和利用のはずじゃ、って？一応平和のために使っているんだ許してくれぃ！

部屋中が振動し、炸裂した火球が玉座付近を焼き尽くす。

そこそこ高い最上階の天井まで、火の手が届いている。

ルシファーもさすがに口をあんぐりとさせている。

指向性を持ったこんな大破壊力にして、あまり魔力を使わなかった爆発を今初めて見せたのだから。

実際、空間にある水素付近を熱系魔法で高温にしたりして、あまり詳しい過程は省くが核爆発を起こしただけ。

爆発そのものを起こしたわけじゃないから、消費する魔力も当然少ない。

「どうだ、まいっ「なかなかやるじゃないか・・・お返しだ。『地獄炎神砲』」」

人のセリフを途中で遮るなんて、非常識な・・・。

攻撃を防がれたのは別に不思議でもなんでもない。

そもそも、相手の攻撃はどちらもほぼ防ぐことができる上に、もつ力もほぼ互角。

あとは、純粋な魔力勝負と、数パーセントの運で生死が決まる。

私の周りにいくつもの魔法陣が出現し、太陽の表面温度並みの火球が全方位から私めがけて掃射されるはずだったらしい。

らしい、というのは、私が≪アトランティスの復讐≫を多重展開し、全て消したからだ。

その隙に、ルシファーとグレが左右から斬りかかる。

「≪永夜の眠り≫≪ライトニング・ガン≫≪グングーニル≫≪漆黒の闇≫≪ダークネス・ナイトウェイブ≫≪会心の氷撃≫≪絶対零度≫≪重力集撃≫≪疾風の乱舞≫≪ホーリーエクスプロージョン≫」

なんだなんだ！全てが究極魔法か、それを超える威力をもったオリジナル魔法。

しかもまだまだ魔覇帝の攻撃は止みそうにない。

「≪完全防壁≫≪イージス≫≪陣破弾≫≪炎弾の射手≫≪風刃の射手≫≪常闇の射手≫≪雷撃の射手≫≪毒霧召喚≫≪スタンバースト≫≪氷短剣の射手≫≪電神波砲≫」

完全防壁と全能の盾、イージスで攻撃を受け、陣破弾で出現した魔法陣の中心を射抜いて壊し、炎弾と風刃、常闇、雷撃、氷短剣をマシンガンのように連続で撃ちまくり、（どっかの弾幕ゲーみたいに）全ての攻撃に当たったら気絶する効果をつけ、シールドはレールガンで壊す。

おそらくだが、あの魔覇帝の能力は「創造具現」とでもいうべき能力だろう。

つまり、自分の思い描いた通りの魔法を自在に操れる。

オリジナル魔法が多いのはそれ所以だ。

で、私もオリジナルの魔法を連続的に打ち続けることができる。

能力を吸収したからだ。

「せいぜい人間のくせに、ここまで魔力が持つとはな。生かしてはおけぬ」

「はっ！こっちの奥の手舐めてもらっちゃ困る！いざとなったら貴様を瞬殺することも可能だ。たぶん私たちも死ぬだろうが、最後はそれで貴様を殺す。どの道、貴様に生き残る道などありはしない。私達との格の違い、見せてあげよう！」

「上等だ。気の強い娘は嫌いではないぞ。我の持つ魔法の中でも一番火力のある魔法でけりをつけてやろう。その前に、この二人をわ

きへやれ。ルシファーは防御が得意ではない。そこの人間に至っては論外だ。転移でどこかに跳ばしておいてくれ。いやなら我がやるが」

「いや、もう全然結構だ。――――ばーい」

瞬時に、ルシファーとグレの姿が消える。

一応、この付近ではなく、パイロキネシースに送り返しておいた。

「お互い、これが最後の衝突になろう。それまでに二、三質問させてもらおう。なぜ我を殺そうとする？」

ああ、絶対聞かれると思ってた。

「もちろん、初めは無理やり召喚されたんだ、でも貴様を倒さんことには元の世界に戻れないうえに、貴様のやった悪行諸々、見過ごすわけにはいかない」

すると、魔覇帝は底意地の悪い冷たい笑みをうっすらと浮かべた。

「ほお。ならおまえは、虫けらや家畜を殺して、そのたびに懺悔するのか？違うだろう。毎日おまえを生かすために、いくつの生命が犠牲になっているというのだ？歩くだけでも蟻が潰れているかもしれないと考えて、出歩かないようにするか？おまえが言っているのは同じことだ。私から見れば一般の人間など蟻と大して変わらない」

「なんだとっ！」

こいつ、いったい何を言い出すんだ？とは思わない。

私が直接、間接関係なく殺してきた生き物の仲間が、『よくも仲間を殺したな！』て攻めてきたら、何のことか理解できない、と思ってもおかしくない。

そして、たとえば蟻や蚊、魚なんかが襲ってきても、私を倒すことはできない。

魔覇帝にとっては、人間も同じぐらいの強さだということ。

この世界では、私たちの場所以上に強さがものをいう世界だ。人間だけが特別、という思考は人間でない魔覇帝には通用しない。

「弱者が強者にやられて、それに文句をつけるのか？強者は弱者に指一本触れるな、傷一つつけるな、何をされても抵抗するなと？それではどちらが強者でどちらが弱者なのかわからんではないか。文句があるならまず、やられないように己を鍛えるがいい」

私が考えていたときにはもう、魔覇帝のセリフが続いていた。

確かに客観的に見れば、魔覇帝の理屈は正論だ。

私がいま言っていたのは、人間に対しての理論であり、魔獣や魔人に対してのものではない。

なら、ここはしょうがない。向こうが正しいとも言えるんだ。こ

の際、それを逆手に取ってやれ。

「わかった。確かに私も自分勝手な言い分だったことは認める。直接被害を受けたわけでもないしな。――――――でも、今から強者として、貴様を倒すが、文句は言うなよ」

「やれるものならやってみろ、人間が！」」

「人間舐めるなよ！魔覇帝！」

私の持つ、最強にして最後の切り札、≪質量変換≫。

一ミリリットルの質量のものを、Ｃ４火薬の爆弾数発分に相当するエネルギーに変えることができる。

なら、魔覇帝の心臓を変換すれば、相当な火力になるというぐらいはわかるだろう。

これを使えば、一瞬で世界も滅ぼせるんだ。たとえばこの城を対象にすれば、もう世界が破滅するだろう。

問題は、これを使ったことがないため、火力の調節が難しい点だ。

魔覇帝のシールドを破り、その身を焼きつつ私が死なない程度にぶっつけ本番でするなんて、干し草の山の中から針を見つけるより何十倍も難しい。

そこに魔覇帝の必殺技を防ぐ、というのも加わる。それでも、やらなきゃならない。

まず、一発目は低火力、そしてだんだんと上げていけばいいだろう。

魔覇帝が何を使ってくるか予想はつかないが、全ての攻撃をワープでどこか砂漠や海にでも転送するか。

「「行くぞ！」」

緊張感が高まりきった一瞬。

「≪質量変化≫！」

「≪永死夜（ネバー・デス・ナイトディー）の旋律≫」

魔覇帝の体の中心を起点に、大爆発が巻き起こるのと、辺りにいる、聞いたものすべてを眠りに就かせる、死の子守唄が鳴り響くの

が同時だった。

刹那。

「な、あれを食らって生き延びられるはずは・・・」

ぴんぴんとして立っている私（爆風と熱で腕にやけどはしていたが）を見て、ついに魔覇帝が口を開いた。

こちらの術は成功したらしい。魔覇帝は体の中心から生じた爆風で四肢を吹き飛ばされ、歯が三分の二ほどけし飛び、髪は焼けただれ、ほかにもいろいろと。内臓が見え〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

（ここから先伏字。見るに堪えないし、書くのもいやだ）・・・という悲惨なことになっていた。

「残念でした♪あれ、爆音と風圧で作った耳栓で、なーんにも聞こえませんでした♪」

騒がしいグレ相手に思いついた風圧耳栓だが、思わぬところで役に立った。

爆音ですら、花火が破裂した程度の音にしか聞こえなかったんだ。死の旋律は全く聞こえていなかった。

魔王の言ったフレーズから推測しただけ。

「くそっ・・・完敗だ。好きにするがよい。おまえ・・・いや、あんたを元の世界に返してやるすべがないが、あの忌々しい源龍のくそったれ野郎なら何か知っているんじゃないか？というか、ほかに次元に干渉できるようなやつを我は知らない。あいつは異世界にわたる力も持っているらしいし。今のあんたなら勝てるだろう、おそらく」

な・・・・・・

・・・

ほかに、次元に干渉できる神がいない？

「本当か、それは！本人はいかにも違うやつのせいです、みたいなことを言っていたが！」

「馬鹿か・・¥本人が素直に名乗りでるわけないだろ・・・ガハッ！やれやれ、もう限界らしいな。さらばだ！我は一切泣き言も文句も言わん。堂々と逝ってやろうじゃないか！」

「お、おい！まだいろいろと聞きたいことが――――――」

しかし、慌てて治癒魔法を使おうとした私より、魔王が手を挙げて、敬礼した方が早かった。

「魔覇帝の名は、おまえに譲る。継ぐかどうかは好きにしろ。名前にも今の我が残せる最大の魔法をかけておいた。何か窮地に陥った時は、魔覇帝を名乗れば一回だけ、致命傷を肩代わりしてもらうことができる。じゃあ、またな！冥界で会おうぞ！」

そして、光の細かい粒子となった元魔覇帝の体は、ゆっくりと煙のように天上に空いた穴からに昇って行った。

数分後。

いろいろな感情から、ようやく立ち上がった私は、新しい目的を元に、ゆっくりと歩き出した。

「源龍・・・いろいろと話を聞かせてもらう必要がありそうだな」

そして、飛翔で外に出ると、いつの間にか夜も明け、朝日が昇っていた。

第8話　覚悟しろ、魔覇帝！（後書き）

「アルファポリス」のランキングバナーをこちらにも張ろうと思っているのですが、なかなかうまくいきません。
やり方を知っている方おられましたら、ぜひ教えてくださると大喜びします。

「最強最弱の魔王虐殺」　終話　ｐａｒｔ　１

時は流れ、パイロキネシース王国では。

「ごうがーい、号外だよーぉぉぉ！」

たくましい売り子から子どもまで、新聞や広告を投げ散らしていた。

そこに書いてあることはただ一つ。

『祝。魔王の討伐完了！』

「マジか！」

「誰がやったんだいったい！」

「勇者が召喚されるとか聞いてたけど、本当にやったんだぁ！」

「最近、王も態度が変わって良い政治をしてくれてるし、本当に変わったなぁ！勇者の償還は失敗したっていう噂もあったが、あくまでそれが噂でよかったよ！」

皆、浮かれて道端でおしゃべりに興じている。

中には、「ものすごい美人と青年、少年が王宮に穴開けて出て行くところを見たぞ」なんて言う恥ずかしいうえに冷や汗ものの情報もあったが、あくまで真相は闇の中。

あのあと合流した私たちは、今王都をぶらぶらと歩いている。

思えば、この世界に来てからゆっくりと観光したのは初めてだった。

せっかくこっちに来たんだ、元の世界に帰りたいとは言え、めったに見られないような光景を見逃す手はない。

ルシファーも同じだったらしく、さっきからきょろきょろとあたりを見回しているのは、見た目通りの（十五歳ぐらい）年齢の田舎者にふさわしい。

もちろん、この程度で、源龍や私をこの世界に連れてきた者たちに対する怒りは、みじんも薄れはしないが。

「ん、この串焼きおいしいっ！」

料理をちゃんと食ったのも初めてに近い。

普通の料理もおいしいが、こうやって露店で出ている者もまた格別においしいのだ。

日本は海外と比べて料理の味が良いと、評判だったがこの世界のはそれを上回っているかもしれない。

「ははははっ。ほしいものがあったら何でも言ってくれ。レイルのおかげで、一気に金持ちになれたんだ、いくらでも恩返しぐらいするさ」

どっか違う国の適当なところで、余った武器や防具、装飾品などはすべて売りさばいて行った。

すると、全部で日本の借金を帳消しにできる程度の金が集まった。

大手のところを少しずつ回っていったり、貴族や将軍たちに渡したりと忙しかったが、一生働かなくても余裕で過ごせる金額だ。

魔法で私たちしか知らないところに隠しておいたし、多重に結界も張っておいたからとられる心配もない。

魔覇帝の力は、なぜかすべて受け継ぐことができたらしく、あの時に使われなかった魔法も我が物にできた。

魔覇帝以上の力を、振りかざす気はないが、元の世界に帰るのを邪魔する強敵・・・たとえば時と次元を操る竜神とかがいたら、使うことになるかもしれないけど。

そんな辛気臭いことを長々と考えている自分に嫌気がさし、フルフルと首を振った。

「これからこのことは、これからのこと、だ。今はとりあえず楽しもうじゃないか！」

私の胸中を察したのか、グレが明るく声をかけてくる。

「そうだな・・・ってなんだか嫌な予感が」

「あああああっ！あ、あんた噂の王宮をぶち壊した姉ちゃんじゃないか？黒髪黒目なんていう珍しい容姿の人間はそうそういない、そしてあんたみたいな美形とくれば間違いない。しかも・・・おい！エヴァン！この方の持ってる杖や着ている服、見覚えないか？」

「あああ、ある！それは、魔王の持つコアを中心にした杖に、遠い昔に作られ、今ではその生成技術が残っていないような、防御服！間違いないな、この方が、魔王や魔覇帝を討伐した、美女勇者だ！」

首を振った時に、フードが脱げたのか、完全にこの世界では珍しい黒髪が漏れていた。

そして、杖やこっそり内側に着ていた魔王のローブの正体まで当てられ、とぼけるわけにはいかなくなった。

「わ、わかったからその恥ずかしい呼称はやめてくださいぃ！誰が美女勇者か！」

「自覚ないのか？あんた、めちゃくちゃ綺麗だぞ。しかも強いし金もあり、性格も控えめで明るくやさしいときた。モテるぞ、あんた！いや美女勇者様！」

「か、からかうのはよせ、グレネスタ！」

いつの間にか担ぎあげられ、えいさ、ほいさと広場まで連行されていった。

「皆！噂の勇者様の登場だ！盛大に祝おうじゃないか！」

「ちょ、や、やめて！」

野球で活躍した選手よろしく、胴上げに合っていた私は、ゆっく

りとレンガ造りの道に下ろされた。

前には、太陽の光を浴びて輝いている、綺麗な噴水がある。

「イエェェェェェェッェェェェェェェェーイ！」」

私が立ったとたん、恥ずかしいことにものすごい歓声に包まれた。

「私は、えーっと、皆の力になれて、よかったですっ！」

情けないことに、ほかに言葉が出てこなかった。

この文章力のなさが原因で、論文を突き返されたことが何回合ったか。

「よっしゃ！酒だ、酒もってこい！」

王都全体・・・いや、大陸中が熱気に包まれるのに、そう時間はかからなかった。

花束やら色とりどりの紙吹雪やらが舞いだしたことにはじまり、何かのパレードみたいになり、握手にこたえ、いろいろ大変だった。

「さあ、どうぞどうぞ！これもあれもそれもあっちのもこっちのもそっちのもお食べください！」

「嫌がらせ？嫌がらせですかもしかしてこれは！」

六個も肉料理がたっぷり入った皿を突きだされ、思わず叫んでしまった。

とたんに当たりが笑いに包まれ、なんとなくおかしくなって、私やルシファー、グレまでつられて笑いだし、それからいろいろとこの王都を案内してもらったり、おいしい料理を食べさせてもらったり、楽しい時間が過ぎて行った。

騒動は三日たってようやく落ち着きを見せた。

そして、私は楽しかったこの三日間に別れを告げ、源龍に話を聞きに行くことに決めた。

その前に一つしておかなくてはならないことが。

「なあグレ、これから先は「お、またどっか行くのか？ついて行くぞ！」ついてこない方が・・・って人の話を聞けぇ！」

「俺がいなかったら、レイル（ボケ）に突っ込んだりする役もいなくなるし、

常識的なことをするのは今までも俺がやってきただろ？それにお宝を換金したりするのも俺の役目だし。いいだろ。もうここまで巻き込んだんだ、今さら何遠慮してんだ？」

グレの印象も、初めて会った時とは大きく変わった。（グレの一人称も、いつの間にか「僕」から「俺」に変わっている。ま、そっちのほうが似合ってるからいいけど）でも・・・。

私は、グレを上から下まで眺めて言った。

「うん。やっぱあんた好みのタイプじゃないな」

「何気にひどいこと言うなぁ！」

その後も押し問答が続いたが、結局着いてくることになった。

もちろん、ルシファーもである。

その頃、時はちょうど、シレンが六歳ぐらいになった時ぐらいだろうか。

吹いてくる風を浴びながら、グレが言った。

「さて、次はどこに行くんだ？」

「最強最弱の魔王虐殺」　終話　ｐａｒｔ　１（後書き）

はい、原作リンク完了です。

原作では何でレイルが源龍を捕えていたのか、あまり書いていませんでしたが、彼女はこの世界に来たことを、心の底から憎んでいたわけではないみたいでしたね。

むしろ、その干渉した本人を許す気がなかっただけで、帰れるなら帰りたい、という風にしておいた・・・はずです。

さてさて、後になりましたが長い間ありがとうございました。

後、最後に原作の方のその後も書かせていただきます。

興味のある方は、ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６６８０ｎ／　をどうぞ。

終話　ｐａｒｔ２（前書き）

これは、「最強最弱の異世界魔法騎士」と絡んでいます。

というか内容はそっちメインなので、これを読むなら、先にそっちを読むことをお勧めします。

終話　part2

＜レイルｓａｉｄ＞

シレン達を送り返した、あの後。私も無事に元の世界に帰ることができた。

一連の事件の犯人である、ネルハントと軽薄な神を名乗る男のおかげで、私が空けた時間と次元の穴を、少しいじってもらって私も元の時間帯に帰ることはできた。

でも、真野はもう戻ってこないだろう。

歴史が変わっちゃったんだ、しょうがない。シエルを送り返した時にこうなるのはわかっていた。

私は私で、今回の思い出を大事にして、前を向いて歩いていこう。

そう、心に決めてある。

私の手元には今、一冊の本がある。

「最強最弱の異世界魔法騎士」という、ファンタジー小説だ。

作者は・・・いや、黙っておいた方が、いいかもしれない。予想はつくだろう。

これを見た私は、やはり自分の行っていた世界が夢ではなかったんだぁ、と再認識できた。

「私も・・・やってみますか！」

真野と違って私に文才はない。

でも、ただの自己満足でも何でもいい。とりあえず私しか知りえないことを、書いていこう。

数ヵ月後

私は、書き終えた作品を真野の家の玄関の郵便受けに入れ、歩いて研究施設に向かった。

あれ以来、毎日欠かさず実験はやっているものの、また新しい実験にチャレンジしたくなっている。

異世界トリップはもう実際にあることがわかったし、原子力の平和利用もやっていて楽しいけど。

私は、この数ヶ月間勉強していた、素粒子力学による、「タイムスリップ」の実証を始めてみようと思う。

<シレンｓａｉｄ>

「ただいまー。お、それお父さんの本じゃないか。しかも一番初めにかいたやつだ。懐かしいなー」

愛息子の翔が、僕の書いた一番初めの本をもって、何やらお母さんと話をしている。

「あら、お帰りなさーい。今、面白いニュースやってるわよ」

妻が指をさしていたテレビのニュースの内容、見なくてもわかる。

原子力を、核兵器や何かに使わず、平和的利用ができる、という情報が公開され、今そのメイン担当開発者、麗留　美育を生中継でインタビューしているところだ。

どうやら、素粒子力学の応用でタイムスリップの実現化の実験に成功したらしい。

異世界トリップに続いて、タイムスリップまでも実現化させるとは・・・

「まだ、過去の世界に行けるだけで、未来の世界に行って戻ってくる方法は闇の中ですが、これからも研究を重ねて、光の表舞台に引っ張り出してきたいと思います」

記者の質問にそう答えている麗留の姿は、とても頼もしく映った。

もちろん、いまさら浮気をする気なんて、まーったくこれっぽっちも微塵もない。麗留には悪いが。

「へえ。大活躍じゃないか。そういや彼女、小説も書いてたみたいだよ、僕と同じで」

スーツを脱ぎながら、僕は妻に話しかけた。

「そうね。これからは、随分科学が進歩するんじゃない？楽しみね―。これだけいろいろなことを、短い人生の中で体験できるなんて、とても珍しいことじゃない？」

確かに、異世界にも宇宙にも、地球は当然一周できるし、過去にも未来にも行ったことがあるなんて、どこに行っても自慢になるだろう。

「違いないな。じゃあ、僕も麗留に少し祝いの手紙でも送るよ。一応、元彼女だからね」

嫉妬するかな、と思ったけど、以外にも妻・・・詩恵　瑠は、何も文句を言わずに笑っているだけだった。

それはそれである意味こわいのだが、と思った時、やっと笑いやんだ瑠が口にした。

「そうね。私からも送るわ。『勘違いしないでね、あくまでも優の手紙は、祝い状だからね！』って」

「それはやめてくれ・・・」

毎日は、どんどんと過ぎていく。

さて、後僕たちは、最期の瞬間までどれだけの事件に巻き込まれるんだろうか？

でもいくらいい事件や悪い事件に巻き込まれようと、今回の異世界トリップ事件が、ダントツの一大事には違いない。

それでは最後に一言。「今までありがとうございました。これからも、よろしくお願いします！」

終話　ｐａｒｔ２（後書き）

祝、シリーズ完結！

もう、シレンたちの活躍がなくなるかと思うとさみしいですが、ちゃっかり次回作にしっかりと取り組んでいます。

２作同時には無理だということを今回痛感したので、一つずつ行きたいと思います。

ではでは、また会いましょう！ノシ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1671q/

最強最弱の魔王虐殺

2011年1月20日22時08分発行